

# 作庭実習「森をつくる」14

## 環境共生園について (6)

岩村伸一<sup>1)</sup>・山内朋樹<sup>2)</sup>

### Seminar in Garden Design “Creating a Forest” 14: “Kyoseien” Garden (6)

Shinichi IWAMURA and Tomoki YAMAUCHI

抄録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしています。参加者は体を使って空間を変えることに取り組みます。その舞台のひとつである環境教育実践センターの環境共生園も着工以来、15年が経過しました。ここでは、環境共生園の現在の姿を報告するとともに、その草むらについて考えています。

キーワード：庭、森、環境共生園、草むら

何気なく入った京都の古書店で、手に取った色褪せた文庫本に、昔の記憶がちょっとだけ頭をもたげました。中学生時代、帰宅途中によく寄った高知の街中にあった古本屋・井上で、朽ちかけた背表紙の、題名が判然としない一冊の本を、積み上げられた山の下の方から引き出しました。ヘルマン・ヘッセの『クヌルプ』。旧字体での印字で、しかも陽に焼けてあかくなった紙のざらついた質の悪い印刷では、読むのに苦心したはずです。それでも、気にかかるところが有ったのでしょう、数日を要して、丁寧に読み上げたのを憶えています。十代半ばの自分は、これに何を見たのでしょう。この本は、既に身近なところには見当たらず、手元から失われてしまっています。わたしのその後に何らかの影響を及ぼしたと思ってきたのですが、内容に関しても、今の意識の内からは欠落してしまっていました。その文庫版を手にしたという訳です。この時、150円という価格もあって購入し、机の脇に積み上げておくことになりました。

先日、この本に順番がまわり、たいした思い入れも持たず軽い気持ちで読み始めました。読み始めてすぐは、初めて目を通す文章のようで、やはり、ほぼすべてを忘れていたと思いました。が、読み進めていく内に、変な感覚を覚えるようになります。もうひとりの読者がいる…。若いときの自分の脳裏を呼び出して、そこを辿るように読んでいるのです。その時の意識が文面から受け取った、命のきらめきであるかのような美しさや哀しさを、若い気持ちを掘り起こすようにひろげてしまいます。ヘッセの物語る場面が進行するにつれ、思いがけなかったい

---

1) 京都教育大学 2) 京都教育大学非常勤講師・庭師

くつかの記憶が立ち上がり、つながっていきます。60 才を超えた自分には、みずみずしい内面の動きはおそらく失われており、反応し得ないものを感じはするのですが、同時にこの記憶の層の下の、別の自分が反応するのでしょうか、かすかにピクッとうごめきます。ちょっと風変わりな読み方だったと思います。顔にしわを寄せつつ、見えづらい目を細め細めて読み進む現在の自分が、未熟だっただろう昔のわたしという意識をそこに呼び出して認めつつ、文字を追っていきます。天性の放浪児クヌルプがながいさすらいを経て、衰えつつある体を引きずるようにして、遙々生まれた町に辿り着き、そこにある風景風物の細部から古い自身の記憶を呼び出してはひとつひとつ確認していく場面などにおいては、まるでこの書物自体がわたしの生まれ故郷であるかのような感慨を抱いてしまいました。かつて、この本に没入した時間が有ったのです。これはわたしにとって、確かに重要であった書物なのです。それにしてもその頃の自分は、これに何をしていたのでしょうか。

やがてクヌルプは、その町からも逃れて山に入ります。そこで出会った昔馴染みの石工との挨拶を交わした後、死に向かうため、去っていきます。

二人は手を握り合った。石工は、ズボンのポケットからこつそり取り出して置いた小さな銀貨を、そつとクヌルプの手に渡した。彼は相手の好意を無にしまいとして、おとなしくそれを受け取った。

故郷の懐しい谷間をもう一度眺めやると、クヌルプは振り返って、アンドレス・シャイブレに頷いてみせた。咳が出はじめた。彼は足を次第に早めて、間もなく山の上の方の森蔭に姿を隠した(1)。

環境教育実践センターの南に隣接する環境共生園も、1999 年の着工以来、その時はセンターのフェンスのすぐ南側だけでの作業だったのですが、既に 15 年が経ちました。2004 年度に職員住宅が解体整地され現在の敷地になり、広い場所を相手にするようになってからも、10 年が経っています(2)。

当初は用途不明な空き地であったのですが、重ねられた毎年の作庭作業の結果、もう単なる空き地ではないように思えます。少なくとも、空き地の上に時間が経ったもの…。いや、現在は北側にある環境センターの植栽から連なった森とその南面に展開する草むらという風に見えるようになりました。そういう方向に庭の造りを進めてきたのですから当然であるとも言えるのですが、それでもこの庭は、時を獲得することで、この場に訪れる四季それぞれに対応する姿を見せるようになってきました。このことは作庭にとっては重要なことです。以前に、「庭は装置なのだ」(3)と言ったことがあります。庭はひとつの造形された人工物であるのですが、その形を整えて器の造作をするだけでは、準備を終えただけで、庭ができたことには成りません。造作がこの地に合い、季節に応じてこの場が自然にうつろうことで、ひとの感性にかかわることになります。そして、ひとと関係を結ぶことではじめて、装置として機能できるのだと思います。

ここで環境共生園の今の姿を記しておこうと思います。これまでの作庭実習報告には、10 月半ばから 12 月の共生園がよく登場します。この場で行われた作業内容に焦点を当てて報告しているからです。それに、実物はここに来ればいつでも確認できると考えたからでもあります。が、ここ数年、年度ごとに見え方が大きく変化するようになりました。このままこの場所の力をしばらく放置しておいてもらえたら、目的とした「森」として認知されることになるのでしょうか。この若い森の形は今だけのものであるのです。だからこそ、現在の環境共生園がどう見えているのかを記しておきたいと考えました。作庭実習で作業をしていない時期の姿、特に、1 月から 7 月について述べてみます。

1月2月の共生園は、寒い空気の中でたまに支柱の補修などをするとき以外は、あまり変化のない冬枯れた白っぽい姿を見せています。その年度の作庭作業もほぼ終わり、雑草が刈り取られた野筋の起伏が目立つひろがり、新たに加えられた真砂土や据えられた石、それにこの年導入され定植された苗が吹きさらしになっている、霜の降りた凍てついた野原です。身を縮め、霜柱を踏みしめて、立ち尽くすのみです。それでも、ちょっと暖かい休みの日などは、子どもらが駆けまわり、つかの間の遊びを展開します。その足下では明るい感じの枯れ草色がひろがっているのですが、その下ではこのまま冬を越そうとする草の緑が地面にへばりついて踏みしめられ、斜めの陽射しに照らされてロゼットが息を潜めています。2月も後半になると冬は緩みはじめ、これらの緑は少しずつではありますが、いつの間にか領域を拡げているのです。藤村の「緑なすハコベはもえず 若草もしくによしなし」という感慨もこの頃の情景なのでしょうか。



1月12日 作庭の記録を探しても、冬の写真は少ない。ここでは、2011年度のもを掲載している。地面はメヒシバなどイネ科の枯れ草色に覆われていたと思っていたが、意外に緑色に写っている。右端に枯れ葉を残して冬を越すクヌギが見える。



2月28日 陽だまりの中で、春を準備するカタバミ、ニワホコリ、オランダミミナグサ、オオイヌノフグリ、コメツブツメクサなど。



3月6日 共生園南端から北の方向を望む。春の光を受けて少しずつ緑が増えていく。

3月は、もしかしたら最も美しい時季なのかも知れません。野原は、それまでの静から動へ大きく舵を切るように、準備してきた緑を地表から一気に立ち上げはじめるのです。陽だまりの石の上に腰を下ろしても寒さを感じることはなくなります。毎日のように、この地面を見るために訪れてしまいます。日ごとに草丈が伸びて、緑の量が見る見る増えていくのです。これまでじっとしていたように思える木々も、暖かさを増していく光を受けて、新しい芽を膨らませはじめます。特に、赤い紅をさしたようなヤシャブシの芽やトチノキの粘りのある大きな新芽は目立ちます。また、トサミズキは淡い黄緑色の袋のような花を次々と下げ、サンシュユは眩しい黄色の小粒の花芽をそこここにひろげます。それらを眺めて、見飽きることはありません。

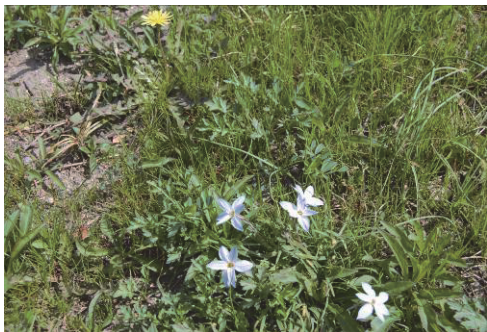


3月12日 芽吹きが近づき散ったクヌギの枯れ葉の間からカラスノエンドウ、ヨモギ、オヤブジラミなどが伸び上がりはじめる。ツクシも見えている。



3月12日 オオイヌノフグリ、ホトケノザ、コメツブツメクサ、ニワホコリなど。中央左寄りにナナホシテントウムシが見える。

4月に入りますと、春は慎みを忘れたかのように、満開です。東側、路沿いにいくつか入れられたソメイヨシノ、西側の小高くなったあたりに植わるヤマザクラなどのサクラの花は勿論のこと、北側、小流れ上流の左右に持ち込まれた木々の花々が、競うように開きはじめます。草たちも一気にふくれあがり、地面からのやわらかな緑の敷物を延べひろげます。その上に座ってよく見ますと、もっと小さい花々が黄色や空色、白、紫を使って、細かい文様を次々と描き出しているのです。



4月1日 ハナニラ、ヨモギ、カンサイタンポポ、ノビル、セイタカアワダチソウなどが見える。



4月5日 池になる予定の低地の北東から護岸の石垣のある南西方向を見る。池底中央に、誰かが植えたスイセンが収まっている。手前の樹木はマルバノキ。

しかし何よりも特筆すべきなのは、冬の間、葉を落としていたモミジやコナラ、直前に枯れ葉を落としたクヌギなど落葉樹の一斉の芽吹きでしょう。赤や黄、青などの色味が少しだけかかった薄い緑色が、しなやかに枝のあちらこちらで揺れて、空中に無数の点を打つように芽を伸ばしてくる様は、見逃せません。そんな枝々のあいだにたたずんで、風に揺られていると、ひとが古くから庭をつくりつづけてきた理由が、このことにあるのではないかとさえ思われてくるのです。そして間もなく、それぞれの枝先には、モミジにはモミジの、クヌギならクヌギの新しい葉の形が、やわらかなそれぞれの色彩を持って、こちらに向けて開かれることになります。



4月15日 明るい陽射しの中の芽吹き。池の東岸から北の森を見る。木立の向こうに、戦争遺跡の門と歩哨舎が写っている。



4月15日 丘の上のカラスノエンドウ、ヤエムグラ、スギナ。子ども達の歩いた跡が道になっている。このあたりでは、春先にツクシの群生が見られる。



4月15日 池の護岸の上。スイバ、カラスノエンドウ、ヨモギ、ネズミムギなどの間から、秋に根元から切ったハギが伸びてきた。



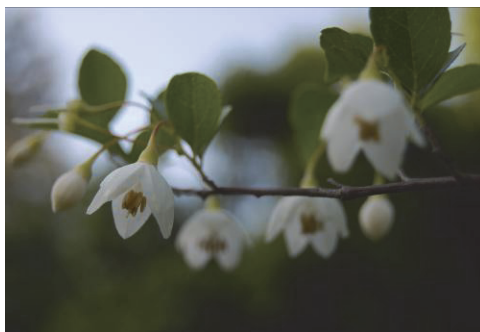
4月15日 ホトケノザ、オランダミミナグサからノヂシャ（花をつけている）、ネズミムギ、コメツブツメクサに変わりつつある。

4月の後半から5月にかけても、やはり花は次々と咲いていきます。それでも、色彩の爆発のように感じられた春も、少し落ち着いてくる印象があるのは、その背景となる緑が変化してくるからでしょうか。この年に開いた草木の新しい葉は成長して、危うい感じの白っぽい黄緑からしっかりした緑へと色を深めていきます。多様だった緑は統一され、5月の新緑として空間をおおいはじめます。

また、着工後15年を経た共生園北端の、森として感じられるあたりでは、落ち葉の積もった日陰になって、草はあまり伸びてこないのですが、思いがけなく、白く輝くシャガの群生が見られるようにもなりました。



5月19日 ニワゼキショウ、ツボミオオバコ、スズメノカタビラ、ヤハズソウ、ヒメコバンソウなど。



5月19日 池の北側、小流れ左右岸にここ数年で何本かのエゴノキを定植している。



6月3日 池の北の草むら。ネズミムギ、カモジグサ、エノコログサ、セイバンモロコシなどのイネ科の上に、ヒメジョオンがひろがっている。



6月3日 池の北側斜面。水分が多い。ヤハズソウが敷き詰められたように繁るほか、シロツメクサ、コメツツメクサ、ヒメコバンソウなどが見られる。

6月に入ると、森は静かさを取り戻すように思います。明るい光を通し輝くように見えた木々の新緑の薄い葉も、たくましさを増し、濃い緑になっていきます。下からの緑も、その草丈をひとの膝や腰をこえて伸ばし、青いかたまりとして立ち上がるようです。一雨ごとに森としての落ち着きを感じさせはじめ、本来の自然の力を見せはじめます。夏のはじまりです。

ここ数年、毎年5月の後半から、京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト「作庭研究—森をつくる」の一環として作庭実習経験者の卒業生や大学院生とチームをつくり、環境共生園の手入れに取り組んでいます。東側を通るアスファルト道路に沿った部分の草刈からはじめ、すでに背の高くなっているヨモギ、セイタカアワダチソウ、セイバンモロコシなど、種類を定めて引き抜いていきます。特に、急激に蔓を伸ばしはじめるヤブガラシと、この時点だとまだ根元からちぎり取ることでできるアレチヌスビトハギを取り払うのは、その後のことを考えると、重要だと思っています。が、こんな手入れで何とか対応できるのは、6月までです。7月に入ると草むらはひとの進入を阻むようになり、自然の繁茂する力は我々の手に負えなくなりますし、気候自体がこんな作業には不適切なものとなっていきます。せいぜい、新しく導入した苗木の根元に生えた草を抜いて、水鉢を整え、ホースを持ち出してたっぷり水をやるくらいですが、それも夏が進むにつれて無理となります。コントロール不可能。草むらは爆発的に伸び上がり、とうとうこの共生園全体が、草藪の中に飲み込まれてしまいました。あ

とは以前にも報告した「過酷な真夏の生存競争」(4)が展開されることとなります。

この草藪をどうするかということが、環境共生園の課題でもあります。野筋をつくったはじめの頃は、大きく伸びた草むらも地面の保水のためとか小さい苗のためという理由をつけることで納得してもらえたと思われませんが、ここ数年は、さすがに「草ボーボー」という言い方がびつたりになってしまいました。わたしが小さいときには、自然の力が溢れだすかのようなこんな光景は、身の回りの日常いたるところに展開するものだったように思い出されます。記憶の中にある自分の背景に、様々な夏の草むらが見られるのです。だから、わたし個人は、目の前にあるこの草の盛り上がりも、この場に欠かせない魅力のひとつとして見てしまっているのだと思います。が、大学の施設のひとつである環境共生園の造園を任されている者としては、ときに耳に入る「この荒れ果てたみずぼらしさはなんとかならないのか」という声に、頷かざるを得ません。こんな街中に、この何の役に立っているかわからない森のようなものをつくり、生き延びさせようと考え、街の目に不快を感じさせないような装いをこの場に与えることも、重要なことだと考えなければならないのです。もう10年もして、ここに持ち込んだ木々が大きくなって陽を遮るようになると、北側の森がそうなったように、下草もあまり育たなくなるのでしょうか、それまでは「雑草」—多くのひとにそう呼ばれています—の手入れは欠かせないということです。

環境共生園での作庭記録を見返しますと、はじめのうちは作庭実習の内容として草引に取り組むことで充分でしたが、2007年度には共生園の草むらも大きく成長し(5)、授業時間のかなりを草引につき込むことになったのが見て取れます。そこで、作庭実習OBで構成される「培土園」に話をもちかけ、年に1回、9月末か10月初めの草の力が弱ったと思えるときに、刈払機を使った草刈を依頼することにしました。これで、おおかたの要望には応じることはできたと思います。が、腑に落ちないものを感じていました。秋のある一日で、夏から冬に風景ががらっと変わってしまうようで、何だか落ち着きません。それに、この草刈の時期では、草々の種はすでに成熟し、作業を通して地面にまき散らされてしまう結果になっているようにも思えたからです。それらが、また次の年に発芽し、草の層を厚くしてしまう…。そこで、山内朋樹(培土園、2011年度から非常勤講師として正式に作庭実習に参加してもらっています。)と相談し、今年度は夏草の盛り、7月の終わりに一度刈ってしまい、様子を見ることにしました。若いとき、雑木林の真夏の下草刈に参加したことがあります。日陰ではあるものの、湿度の高い傾斜地で、ヤブ蚊やブヨにたかられながらの作業は、慣れていないこともあって、大変な重労働であったと思ひ出されます。まして今回は炎天下での作業です。切り倒した夏草は運び出さず、日除けも兼ねてその場に伏せておくことにしました。



11月8日 秋空の下の気持ちのいい夕景。低い部分をエノログサやメヒシバなど様々なイネ科の草が柔らかく覆い、アレチヌスビトハギやヒメジョオンも見られる。セイバンモロコシが全域にひろがり、風に揺れている。

秋の夕暮れ、気持ちの良い草むらを前にしました。ここしばらく、この共生園では見ることのなかった景色です。やっと、環境共生園の四季を体験した思いです。まだ、来年度の草の伸び方にこれまでと違いがあるかを見なければなりません、これだけでも、真夏の草刈は有効だったと思えます。

おそらく古いときから、夏草が荒々しくはびこり、野原のみか田畑までも埋め尽くそうとする様は、日本中いたるところで見られたのだと思います。この島々が持つ地形と気候の関係が、この地の自然にそういう力を持たせているのですが、ひとが住まうためには、それに常に対応せざるを得なかったのです。生活の場である里や耕作地での除草作業は日常的であったし、生活にとって必要な雑木林などでの里山の労働も欠かせないものであったでしょう。時代は進み、ひとの生活スタイルは大きく変わりました。すでに雑木林は生活からは遠くなっています。現在、里山での労働はどうなっているのでしょうか。気になるところではあります。

そんなことを考えながら、道近くの石に腰を下ろしてぼんやりしています。柔らかい西日を浴びた野。なんでもない景色に思われました。いつの間にか視界に夕日が入り、そのあたりの草むらが金色に輝きます。これで充分です。言葉を失ってしまいます。

ここで、山内に代わります。この森の新しい可能性を開いてもらう必要があります。

2011 年 3 月、ベルギーと踵を接するフランス最北部の都市リールにアンリ・マティス公園 (Parc Henri-Matisse) を訪れる。それは現在、フランスでもっとも革新的な庭や公園を発表し続けている庭師のひとり、ジル・クレマン (Gilles Clément: 1943-) の作品群を訪ねての調査旅行でした。



高い絶壁に囲まれた高台を中央に抱えたこの公園は、1990年から1995年にかけてつくられたクレマンの主要な仕事のひとつです。総面積 2500 m<sup>2</sup>に及ぶこの高台はデルボランス島 (L'île Derborence) と名づけられ、その



上部は最初にいくつかの植物を定植しているものの、それ以降は年に二回の植生調査のとき以外人は立ち入らず、動植物の成すにまかせられています。

この島の上部では、リールが属する西岸海洋性気候という条件に見合った植生遷移が開始され、風や鳥によって運ばれる公園外の植物と既存種との競合のなかでひとつの極相林が作りあげられていくことになるでしょう。そうした植物が落とす種子はこの島の麓の芝地に広がり、毎年毎年、少しずつ公園の植生やその配置を変化させ、動かしていきます。そこでは領域を拡大しようとする森の展開力と、その進展を押しとどめようとする力の拮抗、林縁と明るく開けた空間との関係が極端な形で実現されているようでもあります。

アンリ・マティス公園を訪れた時点では、すでに著作や作品集をとおしてクレマンの思想に親しんでいました。クレマンが自身の庭を特徴づけた概念に「動いている庭」(jardin en mouvement) (6)があります。これは庭のなかの植物群落が種子や地下茎によって年々移動していくのに合わせて園路や植栽スペースといった庭の骨格を変容させ、手入れの仕方もそれに見合った形に変えていくような、きわめて斬新な庭のあり方を指す概念です。しかしながら、ひととき庭や公園を訪れる者にとって、植物が動いている様を目の当たりにすることは困難でしょう。植物は予想以上に移動するのだとしても、同じ場所にずっととどまっているようにしか見えないからです。

せっかくの訪問でしたので、必死になって公園の随所にカメラを向けてみるものの、植物の動きそのものを記録することは諦めざるをえません。その代わりに動きの痕跡らしきものをひとつおとり撮影し、帰路につこうとリール・フランドル駅に向けて歩き出したとき、綿毛のようなものがいくつか風に漂っていることに気づいて顔を上げました。見渡せば公園の奥から市街地へ向けて、おびただしい数の種子が、陽炎のように沸きあがっており、ゆっくりと空を漂っています。

植物はたしかに動いている。公園のなかではその痕跡しか目にとまらなかったのですが、今まさに、目の前で、植物が動いている。



クレマンの思想を鮮明に理解させる出来事でした。後で写真を見返して分かったことですが、あれはおそらく公園内の湿地帯に群生していたガマの種子でしょう。ガマは人間によってこの公園に定植されました。しかしだからといってずっとこの公園にとどまっているとはかぎりません。広く北半球に分布するこの植物の本性からして、それは公園から溢れ出し、放浪するのです。アンリ・マティス公園奥地の水辺から沸きたった種子の数々は、付近に湿地や沼地さえあればそこに定着し、再び花を咲かせることになるでしょう。こうした植物のありようを、クレマンはこう要約しています。

つくりこまれた庭から逃れた植物が待ち望んでいるのは、花を咲かせるのに適当な土壌だけだ。そして風が、動物が、機械が、種子をできる限り遠くへと運んでいく(7)。

もしわたしの衣服や靴底に絡んだ種子があったとすれば、あるいはザックに入ってしまった種子があったとすれば、それらは TGV に乗ってその日宿泊予定だったパリへと南下し、あるいは後日逗留する予定だった南仏ニームへ、あるいは飛行機に乗って関西国際空港にまでやってきたかもしれません。

人間の旅は、植物の旅を加速させます。それはときに在来種と外来種のあいだに葛藤を引き起こし、社会問題の引き金になりますが、植物が地域や大陸を越えて混ざり合うこと、クレマンの用語で言えば、地球規模の混淆 (*brassage planétaire*) とは植物の本性そのものでしょう。多くの植物はそもそも風や川、潮の流れ、あるいは昆虫や鳥、動物、ひいては人間の移動を媒介として繁殖してきたのです。

人間は旅をしてきた。植物とともに。この途方もない混淆によって、長きにわたって隔てられてきた諸大陸の花々が出会い、新しい風景が誕生する(8)。

こうした植物の混淆が、もっとも際だって実現されているのは、耕作放棄地や空き地、車道脇、線路や河岸の土手などの空間です。日本でもこうした空間では、ヒナゲシやセイタカアワダチソウ、カモガヤなどの外来種とともに、ススキやヨモギ、クズ、ノバラなどの在来種が混ざりあった風景がよく見られます。

ここで重要なのはこの風景が、あるいはこうした種の交錯が良いのか悪いのか、ということではありません。地球規模の混淆がきわめて広範な領域で実現してしまっている現在、わたしたちの環境共生園での実践は、必然的にこうした植生環境からスタートすることになる、ということなのです。

環境共生園は「森をつくる」というコンセプトのもと、毎年地形や石組を調整しながら樹木を定植し、約 15 年かけて敷地の北側から南側に向かって領域を広げてきた場所です。「森をつくる」というコンセプトのとおり、初期に手をつけた敷地の北部では、木立が光を阻む薄暗い林が成立しています。そこではクヌギやイヌブナ、ミズナラ、アラカシ、クロマツなどが伸びやかに成長しており、林床には落葉がつもりその下にはすでに腐植土が形成されています。

少し南に下って明るい林縁に出れば、イロハカエデやエゴノキ、クロモジ、ハギなどが連続的なソデ群落様の植栽を展開しており、この木立のあいだを縫って敷地中央の池まで、排水のための小さな流れが形づくられています。流れの脇にはサワフタギやオトコヨウゾメ、コデマリなどが植えられ、池に近づくほど樹木が少なくなり、ついには一面の草地、明るく開けた空間にいたります。環境共生園のなかで、今後わたしが注目していきたいと考えているのは、まさしくこの敷地中央部から南部にかけての大きな空間です。

環境共生園はすでに 15 年の歳月をかけてつくられてきています。敷地全体を見渡しても、すでに十分な地形、

石組がほどこされています。そこにはこれ以上手を加える部分はほとんど残されていません。植栽についても北部の雑木林の樹木はすでに10mに達する勢いですが、薄暗くなった林床では遷移初期の草花はほとんど淘汰され、あとは経過観察と少しの手入れで済むという段階です。全体の造作と北部の森にかんしては、まだ手を加えることはできるとしても加える必要はないという、作業の分水嶺とでもいうところにさしかかっています。2009年度の報告を見返してみても、そこには一応の完成が記されており、あとは木々の成長を待つばかりになっています(9)。

それにたいして中央から南部にかけての植栽は苗木段階のものが多く、まだ定着していないものも散見されます。樹木が小さいので地際の日照もよく、毎年雑草が生い茂ることになります。このため作庭実習では、例年この開けた空間の草刈からはじめなければなりません。樹木はいくつか定植されているものの、いまだ森とはなっていない遷移初期相のこの空間こそ、今後わたしたちがかかわっていかねばならない空間なのです。この場所でおこなわれる例年の草刈について、詳しく触れておきましょう。

この場所の草を刈るのに必要な作業量は、記録によれば2007年度を境として飛躍的に増加しています。2007年度の草刈は、それまでとはまったく異質な段階に入り、当時の状況を記した岩村伸一も「今回の草刈は例年になく大変です」(10)と書きつけているほどです。驚くべきことにその年、草刈に投じられた実習の回数は6回。作庭実習は2コマ連続の実習ですので、それが6回ということは延べ12コマにわたって草刈をしていたこととなります。この極端な変化にたいして、報告者の岩村が付した言葉を引いておきます。

昨年あった、風に揺られている草原のイメージとはまるで違って、植物が層になって重なりもつれ合い、盛り上がるような厚さを感じさせます前年同様4台持ち込んだ刈払機はローターに草が絡まるばかりで、ほとんど有効ではないのです。この1年で共生園の草地は大きく成長し変化していると実感しました(11)。

さらに記録を遡れば、2004年度には作業の合間に数人で草引をしていたのが、2005年度には刈払機まで投入して全員で2回、2006年度には同様のやり方で3回半を費やしたことが分かります(12)。注意してみれば、草刈の作業量は2度の飛躍をとおして増加しているようです。

まずは、2004年度から2005年度にかけての飛躍。これは2004年度に共生園に隣接する公務員宿舎がなくなり、共生園の敷地、つまり実習で作業をする必要のある範囲が一举に広がった年です。次は先ほど言及した2006年度から2007年度にかけての飛躍。これは敷地が広がってから2年をかけて草の株が定着し、大きく成長したことが原因ではないかと考えられます。

なぜ、ここで草刈という地味な作業に注目したのか。それは雑草の繁茂が一因となって、それまでいわゆる庭の作法に則ってつくられ、管理されてきた環境共生園のあり方が、大きな転換点を迎えたからです。岩村も告白しているとおり、「夏の日照り」による水不足と「草の繁茂」という厳しい環境下では、「庭としてコントロールすべき領域が広がるにつれて無理が生じてきます」(13)。環境共生園の管理は、このとき、「庭として状態を保つ」ことから「成り行きに任せてみる」ことへと大きく舵を切ったと考えられるでしょう(14)。それ以降、環境共生園は、「この数年間でここに意図的に持ち込んだ植物と、この場にやってきた植物。そのせめぎ合いと、それに割って入ろうとする作庭者の意図」(15)が絡みあう、きわめて興味深い実践の場となったのです。

この転換は比較的安定している敷地北部の森のなかでは起こりえなかったことです。森に比べれば相対的に変わり続けており、思うようにならない草地だからこそ起こりえたことでしょう。不安定で動いているものは、それにかかわる者の思考と行為を絶えず触発し、その都度その都度判断を迫ってくるからです。

さて、2007 年度に岩村と坂東忠司がおこなった植生調査によれば、この草地にはツルマメ、アレチヌスビトハギ、ヤハズソウ、アレチギシギシ、イヌタデ、クサキビ、ドクダミ、セイバンモロコシ、メヒシバ、ヒメムカシヨモギ、ヨモギ、エノコログサ、キクイモ、セイタカアワダチソウ、ヤブガラシ、イタドリといった、遷移初期相の植物名が多く並んでいます。これらの植物のなかには、風に乗って、あるいは鳥などに運んでもらうことで到来した種もあると思われませんが、坂東によれば、複数箇所から持ち込まれた土壌に種子や地下茎が含まれており、それが発芽したと考えられるようです(16)。

確認しておくならば、環境共生園内の土は既存土壌の他、後の大がかりな地形工事の際に持ち込まれた附属養護学校(当時)、附属京都中学校、附属高等学校からの残土と、地形の微調整のために持ち込んだ真砂土が斑模様をなしています(17)。つまり人間が移送した土とともに、植物もまた移送されてきたのであり、土壌分布と植生のあいだには一定の緩やかな結びつきが見られるのです。

2013 年度に、再び簡略な植生調査を試みたところ、2007 年度に作成された植生図と比べてイネ科のセイバンモロコシが急速に広がっていることが分かりました。夥しい種子を風散布するこの強健な植物は、昨年真砂土を入れたエリアでほぼ純粋な群落を形成していました。このためセイバンモロコシは、例年地形を微調整するために持ち込む真砂土に紛れて到来し、発芽し、展開したのだと仮定できるでしょう。

こうして、わたしたちが思いもしないかたちで、植物は旅をし、混淆していきます。それは森や庭、あるいは公園をつくっていくなかで、人間の意図を越えたところで生じてくる予想外の出来事でしょう。わたしはこの開けた空間の植物の動きを記録しながら、ここにどのような「新しい風景」が立ち上がってくるのか、今後の推移を報告していこうと考えています。

最後に今年の作業を報告しておきます。2013 年度は 7 月 27 日に一度、実習の時間外に刈払機による全面的な草刈をおこないました。例年この草刈は 10 月におこなっていました。しかし 2007 年の大繁殖から 5 年を経た今では、10 月にもなれば草の繁茂が著しく、相互に絡み合い、雑草と苗木の区別もつかない藪となって手がつけられなくなるからです。

7 月に刈ってみたところ、温暖でよく雨の降る日本の夏を経た 10 月には再びもとの草むらに復帰していました。とはいえ、さすがに草丈や草の密度は低くなっており、特筆すべき点として、例年樹木に被害を及ぼしてきたツルマメがほとんど成長していないなどの効果が観察されました。

次に植生図を作成し、実習時間を使って 11 月中旬から 12 月下旬にかけて、草丈が高く繁殖力旺盛なセイバンモロコシと、衣服に大量の果実を付着させるヌスビトハギ(いわゆる「くつつきむし」です)を集中的に根からとり除きました。これはこの草地に人間が入りやすくするための作業です。残りの草本は根を残して刈り取ることで、次年度以降の変化を観察する準備が整えられました。

環境共生園の草地を占める草本植物の多くは、きわめて強健で繁殖力のある種、言葉を返せばいわゆる雑草が中心となっています。しかしこれらの種は、自然災害や人間による開発で裸地と化し、樹木が生育できないような厳しい環境をすばやく緑化する特性を持っています。また、いずれは草むらのあいだから芽生えてくる樹木に光を奪われ、薄暗い林床に吞まれて消えていく儂い種だとも言えるでしょう。

だからこうした植生はすでに優勢樹種が確定している森林に比べて不安定で変わりやすく、森林にはない多様性を有してもいます。この多様性とは、植物種の多様性だけでなく、そこにやってくる昆虫や爬虫類、鳥類、ときに哺乳類も含んでいます。今やこうした環境の少ない都市部では、空き地や河岸の土手などの空間とともに、環境共生園は多様性の保存所ともなっているのではないのでしょうか。



もう一度、岩村です。

土の上を歩くことが好きです。秋の終わり、空の光が力を失って黄色になったように見える日。久しぶりに大原野の田の中の道を歩いています。いつも、とりとめない思いや考えの断片が浮かんで来ては消えていきます。「ワタシハ ナニヲ フンデルカ」ふいに口から音にして出しました。「ワタシハ ナニヲ フンデルカ」(18)若いときに読んだカレル・チャペックの本にあった印象的な言葉です。その頃こんな風にして、よく旅に出たことを思い出します。遠くにかすんでいるガスタンクまで、次は向こうに見える大きな木まで…。そのときも畦道や轍の残った農道などを選んで、土の上ばかりを歩いたのです。こちらに来てからも、絵画に出会うまで、たびたびこんなことを繰り返したのです。少年のときに読んだ『クヌルプ』の影響はかなり後まで続いたように思われます。当時のわたしにドイツの風景など思い起こせるはずもありませんから、そこにある「懐かしい谷間」は子どもの時に遊びに通った比島山からの町の眺めで補ったでしょうし、「森蔭」は薊野の森を下敷きにしたことでしょうか、それでも、まだ見ぬ世界を追いかけようとしたことは間違いないのです。

西山の山並が近づいています。いつの間にか「森をつくる」ことについて考えを巡らせていました。いまだ、環境共生園が架空の森でしかなかったとき、わたしは次のように記しています。

森をつくりたいと思います。圧倒的な自然の森の前に住まうひとのように、記号や機能で飽和状態になった空間の中に、空としての森を置いてみたいと思います。意味で切り刻まれた日々の時間のすぐ横に、不可解であるような森を転がしてみたいと思います。やがて、時を経て、風景となって、枝先に新しい葉をひろげます。それは依然として謎であり続ける芽吹きです(19)。

庭にしろ、絵画にしろ、作品は言葉にならない訳のわからないところに降り立ちます。まずはそれを見つめ、自分に属するものとして認める作業が不可欠です。その意味からすると、まだ見ぬ世界を追い求め、ものをつくることに関わる者としては、当然の表明であるとも思えます。現在、環境共生園は具体的な森として姿を現しはじめました。しばらくはこの中に分け入って、言葉を探すことになるだろうと思っています。突然、ひとつの考えが浮かびました。「森をつくるということは、子どもの頃からの要請である…」。環境センターで庭を造るということは依頼を受けて考えはじめたことです。そこでの作庭に使われるのは、わたしが師古川三盛の作庭から受け継いだ、森に関する技術のはずです。それでも、ここに現れつつある姿は、どうしてもわたしを古い記憶に連れ戻してしまいます。判断は時間を要するようです。あわてることはないでしょう。いずれにしろ、環境共生園という空間は、いつの日か「森」という普通の言葉と重なって、わたしから遠ざかっていくのです。

歩き回るとは、いつも何らかの風景、「それ」と呼べる気分のようなものを前にして終わります。すでに西山の麓です。陽は傾き、山裾は山陰に入ろうとしています。道路沿い、ガードレール越しの薄暗くなっている一角に目は止まりました。日頃は注目することのないなんでもない片隅。蔭に包まれた竹藪や木立の深緑の上に、ヤマハゼかなにかの紅葉が灑置され、その横に黄色に色づいた蔓が巻き付いています。自然の一時の演出です。見つけたことを喜びながらいつとき眺めました。今日の散歩の収穫です。これで引き返せばよかったのでしょうか。ガードレールの脇に狭い窪みがあります。どうやら小道のように誘われてしまいました。数歩入ると進めない。足元には投棄されたテレビなどのかたまりが散乱し、長年放置され枯れ折れ重なったモウソウチクと上からなだれてきた朽ちたスギの倒木が行く手を塞いでいる斜面。この日常の崩落を前にして、不意に何かの死体を目にしたようなおののきを感じ、その場にすくんだのです。



註

- (1) ヘルマン・ヘッセ 相良守峯訳 (1938)『漂白の魂 (クヌルプ)』岩波書店 p.134
- (2) 岩村伸一 (2007)「作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について (1)」『京都教育大学環境教育研究年報』第 15 号 pp.90-91 を参照してください。

- (3) 岩村伸一 (2003) 「作庭実習「森をつくる」1 石を据える」『京都教育大学環境教育研究年報』第11号 p.38 と、岩村伸一 (2003) 「作庭実習「森をつくる」2 庭と時間」『京都教育大学環境教育研究年報』第11号 p.49 を参照してください。
- (4) 岩村伸一・坂東忠司 (2008) 「作庭実習「森をつくる」7 環境共生園について (2)」『京都教育大学環境教育研究年報』第16号 p.119 と、岩村伸一 (2009) 「作庭実習「森をつくる」9 環境共生園について (3)」『京都教育大学環境教育研究年報』第17号 p.126 を参照してください。
- (5) 岩村伸一・坂東忠司 (2008) 「作庭実習「森をつくる」7 環境共生園について (2)」『京都教育大学環境教育研究年報』第16号 p.117 を参照してください。
- (6) 「動いている庭」については次の論文を参照ください。山内朋樹 (2013) 「動いている庭」から「野原」へ——ジル・クレマンにおける風景と環境』『立命館言語文化研究』立命館大学国際言語文化研究所、第25巻1号、2013年10月号、pp.59-74。
- (7) Gilles Clément, *Le jardin en mouvement. De la Vallée au Champ via le parc André-Citroën et le Jardin planétaire*, Paris, Sens & Tonka, 2007(1991), p.14.
- (8) *Ibid.*, p.14.
- (9) 岩村伸一 (2010) 「作庭実習「森をつくる」10 環境共生園について (4)」『京都教育大学環境教育研究年報』第18号、京都教育大学附属環境教育実践センター、p.41 「環境共生園の基礎となる造園工事は、これで大方完了です。年々の草刈りや必要な補修は行わねばなりません、今後しばらくは骨組みには手を出さず、見ることに専念しようと思っています」
- (10) 岩村伸一・坂東忠司 (2008) 「作庭実習「森をつくる」7 環境共生園について (2)」『京都教育大学環境教育研究年報』第16号、京都教育大学附属環境教育実践センター、p.116
- (11) 同前、p.117
- (12) 同前、p.117
- (13) 同前、p.119 強調は筆者による。「作庭当初は野筋の保水等に役立つだろう下草も、ここまでになると事情は変わります。ひろがった庭で勢いを手にして爆発的に生い茂りました。[...] この広い空き地にやわらかい土を入れ、それを放置しこの場の自然の成すがままにすれはどういうことになるのか。導入した苗のそれぞれに責任を持ち、庭を成立させようとする者にとっては、このバランスの崩壊は、残念であり不満であります。当然水をやり雑草を刈らなければならぬことになる。」
- (14) 同前、p.119 「考え方を考える必要がありました。これらをマイナスにとらえるのではなく、前向きにとらえること。このこと自体は自然であり、この場の成り行きに任せてみること」。
- (15) 同前、p.120
- (16) 同前、p.125 「この場所に生育している多くの植物は、持ち込まれた土壌に含まれていた種子や地下茎が発芽したものである可能性が高いと思われます。キクイモなどはその代表ですが、本来は風によって種子が運ばれるセイタカアワダチソウやヨモギなども、整地されてからの時間と群落の大きさを考え合わせてみると、持ち込まれた地下茎の断片から発芽して群落を形成したと考えられるからです。また、土壌の水分条件によって、発芽・生育する植物種が選択された結果、高台と池の部分で植生の違いが生じたことも重要な観点であると思います。さらに、かなり多様な植物が確認できるもう一つの要因として、持ち込まれた土が単一の場所からのものではなく、複数の場所から持ち込まれたことも見逃せない要因であると考えられます」
- (17) 岩村伸一 (2009) 「作庭実習「森をつくる」9 環境共生園について (3)」『京都教育大学環境教育研究年報』第17号、京都教育大学附属環境教育実践センター、p.129
- (18) カレル・チャペック 小松太郎訳 (1975) 『園芸家12ヶ月』中央公論社 p.118
- (19) 岩村伸一 (2005) 「作庭実習「森をつくる」4 庭の自然について (2)」『環境教育研究年報 第13号』p.73